

【ちょっと蘊蓄；編曲およびアンリ・ビュッセル】

「編曲」というと、「アレンジ」という英語が思い浮かぶ方が多かろうと思います。確かにポピュラー音楽では「ソングライター」の書いたメロディに、「アレンジャー」が種々の楽器でリズムや伴奏を付け、さらに前奏・間奏・後奏を書いたり、対旋律等の飾りを入れたりして、実際のステージや録音で歌手が歌えるようにします。このようにポピュラー音楽では、「アレンジャー」の仕事は「ソングライター」と同等、あるいはそれ以上に曲のヒットに関わっています。（なお、ポピュラー音楽の世界では、作曲家は「ソングライター」と訳され、クラシックのように「コンポーザー」とは言われなようです。）

「編曲」の領域はこれだけではありません。クラシックではどうでしょうか。

クラシック音楽で「編曲もの」として有名な曲は、ムソルグスキーのピアノ曲をラヴェルが管弦楽に「オーケストレーション」した「展覧会の絵」ではないでしょうか。今回の「小組曲」はこのパターンです。ピアノの音を単純に他の楽器に当てはめることもありますが、若干手を入れ、オーケストラ（あるいは楽器のアンサンブル）ならではのサウンド作りをすることも多くあります。

逆にオーケストラの曲を学習用やオペラの練習用にピアノに編曲することもあります。これは「リダクション」と呼ばれます。

また例えば、バッハやベートーフェンが自作のヴァイオリン協奏曲を、チェンバロやピアノの協奏曲に編曲していますが、このように或る楽器（歌）のために作られた曲を別の楽器で演奏するようにすることも「編曲」です。これは「トランスクリプション」と言われます。この分野は実にたくさんの編曲が、作曲者自身、他の作曲家・演奏者によってなされています。

さて、今回の「小組曲」の編曲を行ったアンリ・ビュッセル（ビュセールとも表記されます）ですが、彼は1872年1月16日生まれ、1973年12月30日、101歳で亡くなっています。パリ音楽院でフランク、ギロー、グノーに師事しました。その作品は、日本ではほとんど知られていません。彼の名は、この「小組曲」編曲者として知られている状況です。【曲目解説】にもありますが、ドビュッシーとも深い交流があり、この「小組曲」以外にも、ドビュッシーの「春」はビュッセルがオーケストレーションを行っています。

「小組曲」では管弦楽の各楽器の特徴が実によく生かされ、最初からオーケストラの作品として書かれたようです。各楽器がバランスよく活躍し、演奏する者も楽しめる、名編曲だと思われれます。

ビュッセルは師匠のグノー死後、その未完の「レクイエム」を完成させており、「クラシック界の名アレンジャー」と言えるかもしれません。